

Tess の批評をめぐる Thomas Hardy と Andrew Lang の衝突

清 宮 協 子

序論

Thomas Hardy (1840–1928) の *Tess of the d'Urbervilles* (以下 *Tess*) は、週刊誌 *Graphic* に 1891 年 7 月 4 日号から 12 月 26 日号まで 24 回に分けて連載され、同年 11 月末に、Osgood, M'Ilvaine & Co. から 3 巻本で出版され、出版後すぐに、多数の定期刊行物に書評が載せられた。年内と年明けすぐに出された *Star*, *Speaker*, *Daily Chronicle*, *Pall Mall Gazette*, *Athenaeum*, *Illustrated London News* 等の雑誌に載せられた批評は、作品の内容に対しても *Tess* というキャラクターに対しても好意的なものが多かった。しかし、1 月 16 日の *Saturday Review* に載った匿名の批評は、内容にも *Tess* に対しても、明らかに批判的なもので、*Tess* は「不快な話が、不快に語られている」(“an unpleasant story in a very unpleasant way”) とし、Angel が *Tess* を置いてブラジルに去った後、*Tess* は、借地権が切れ家を失い、経済的に追い詰められても、Alec と復縁することは避けて、路上で死んだ方が望ましかったのではないかと書かれていた。Hardy は、*Saturday Review* に署名がなかったため、出版界に知人の多い、友人の Edmond Gosse に手紙を書き、誰が書いたものだろうかと尋ね、Mrs. Andrew Lang の書いたものらしいということを推測する返事を受け取っていた (Thwaite 384)。Gosse は、「こんなひどい批評は気にしないでいい、君の本は素晴らしいし、行く先々で褒め言葉しか聞かない。君の仲間と、正しく受け取ってくれる男性読者の間では、君の地位は高められている」と慰めたが、Hardy はそれが気になっ

てだけでなく、その批評が、実は夫で、当時活躍していた文人 Andrew Lang (1844–1912) によって書かれたのではないかと疑っていたという (Thwaite 384–5)。その 1 カ月後の 2 月、*New Review* に Lang は、署名付きの書評を載せた。それは *Saturday Review* に掲載された書評の内容よりも、慎重ではあったが *Tess* に批判的だった。

半年後、Hardy は *Tess* の第 5 版を出版するにあたり、新しく序論をつけ *Tess* への批評をざっと分類し、賛辞には礼を、批判には反論を述べたが、その反論の中には、Lang を指していると、誰の目にも明らかな部分が含まれていた。それは *Illustrated London News* に載せられ、それを読んだ Lang はさらにそれに対する反論を *Longman's Magazine* に載せることになった。

Hardy は、*Tess* 出版後、厳しい批判に悩まされ、それを苦に小説の筆を折ったと一般的に思われている。しかしながら、当時の書評を眺めてみると、確かに *Saturday Review* や *Spectator* など、低い評価を下した例もあるが、*Speaker* や *Pall Mall Gazette* など Hardy の才能を認める好意的な批評も数多く存在していたのである。本稿は、Hardy と Lang が意見を戦わせた背景を探ることにより、当時 Hardy が置かれていた環境や状況を明らかにし、そこから小説家としてのキャリアを放棄した理由を推測するものである。第 I 章では、ふたりの小説の表現技法についての考え方の違いを考察する。第 II 章では、出版業界における立場の違いを分析する。第 III 章では、衝突の根底にあるのはふたりの自然観の違いであると論じ、それが Hardy を小説界から退かせる原因となったと推論する。

I. 表面上の衝突——表現技法への考え方の違い——

Hardy と Lang のやりとりを追うと、新しい表現を追求しようとする革新的な Hardy と、既存の表現から外れることを嫌う保守的な Lang という構図が浮かび上がる。*Tess* において Lang が挙げている納得ができない点の中から、本稿では、実際に Hardy が反論を加えている「神々や神が、悪意を持っているように描かれていること」を考察する。まず、やりとりの経

緯を追う。Lang は、*New Review* に署名付きで載せた書評の中で、作中 Tess が最後に絞首刑になり、語り手が『正しい裁き』がなされたのだ。そしてアイスキュロスの言葉を借りるなら、不滅なる神々の長は、Tess を弄ぶのを止めたのだ」(“‘Justice’ was done, and the President of the Immortals, in Æschylean phrase, had ended his sport with Tess.” T. Hardy 373) と語っていることに對し、「神々もしくは神がいるのなら、その神がこんなに悪意をもっているように捉えられているのはおかしいし、いないのならこの表現は何の意味も持たない」¹ と書いた。

それに対し、同年7月 Hardy は、第5版の序において「ギリシャの神々に対してであろうと、キリスト教の神に対してであろうと、その理不尽さに抗議することを、さも私の原罪であるかのようにとらえているようだが、それは私だけでなく、例えばシェイクスピアの作品にも見られる」² と反論した。

それに対し、同年11月 Lang は *Longman's Magazine* において『不滅なる神々の長』の部分は、作品の道徳の中心を表す一文のようだが、無神論者にとってもキリスト教徒にとっても、他の宗教の信者にとっても意味をなさない言葉だ。もし Hardy が悪意を持った神を信じていないなら、心のこもっていない気取った言い回しだ³ と、*New Review* でしたのと同じような主張を繰り返した。

上記の批評で Lang が示唆しているのは、語り手が、Tess の道徳性を強調しているにも関わらず、彼女は忍耐を強いられ転落している。それは、少なくとも慈愛深いキリスト教の神が存在しない世界を描いた作品だと受け取れる。しかしながら、最後に神が出てくるのは、作品世界に道徳的な矛盾があると考えられることだろう。

一方で Hardy は、確かに自分は慈悲深い神を描くことはしていないが、古典では必ずしも慈悲深い神ばかりが登場するわけでないのに、なぜ自分ばかりが非難されないといけないのかと答えている。前掲のアイスキュロスの『縛られたプロメテウス』は、プロメテウスが、ゼウスに逆らい人間

に火を与えた罪で、コーカサスの山の岩に鎖で縛られ、秃鷹に肝臓をついばまれる罰を受けた話であり、一般的に不当な仕打ちに耐える忍耐の象徴とされているので、ゼウスは必ずしも人間に対して慈悲深くはない。

このやり取りにおけるすれ違いは、Lang は *Tess* を自然主義の小説を手本にしたと考えているらしいのに対し、Hardy 自身はギリシャ悲劇を手本にしていることから生じていると考えられる。当時、フランスでの Emile Zola などの自然主義の小説の流行がイギリスにも伝播し始めた頃であり、Lang は、Hardy がその影響を受けて *Tess* を書いた 것이라고考えている。それは、Lang が、女性の性的欲求を描いている点が気に入らないと Gustave Flaubert の *Madame Bovary* (1857) と *Tess* を並べて論じていることから推測できる (Cox 242)。自然主義の小説は、それまで描かれることがなかった、貧しい階級の人々や、立場の弱い女性に焦点を当て、彼らの生活や情念をありのままに描こうとしているところに特徴があり、Hardy もその影響を全く受けていないとはいえない。

しかし、Hardy が、*Tess* を自然主義の小説ではなく、ギリシャ悲劇を土台にして書いたことは、Hardy 自身が明らかにしていることである。まず、1891 年に *New Review* に載せた「小説の科学」(“Science of Fiction”) という小論で、Hardy はフランス自然主義の批判をしている。フランスの自然主義者達は、見たままを細かく描写することで物事の真実が描けると思っているが、自分は物語的な技巧を加えることで、より真実に近づくことができると信じている。表面的な物に対する鋭さは、内面的な物への鋭さを意味しないと Hardy は語っている。(Orel, Thomas 125) また、彼は 1892 年の日記に「最も素晴らしい悲劇とは、優れた人間が不可避免的に転落するものだ」と書き、これから悲劇を書こうとしていることを明らかにしている (F. Hardy 251)。

このような Hardy の悲劇を書こうとする意図は、実際に彼の作品にも表れている。ふたつ例を挙げると、まず、フランス自然主義が多くの場合において物語的な筋をもたないのに対し、*Tess* には悲劇的な構造が明確であ

る。例えば、Tess をフランス自然主義小説にパロディ化したと言われる George Moore の *Esther Waters* における主人公 Esther の暮らし向きは、上昇したり下降したりしながら、最終的には苦労の中で子供を育てあげる結末になっている。一方で Tess の生活は、明確な悲劇的構成を持っている。

さらに、Tess には Esther にはない、先祖が貴族だったという設定がなされている。Tess も Esther も、時々頑固で激しい性格であるところが似ているが、Tess の場合その性質が、先祖の性格と結びつけて語られるのに対し、Esther は、特に何とも結びつけられていない。Hardy がそのような設定をしたのは、ギリシャ悲劇の主人公は、ソポクレスの『オイディプス王』に見られるように、高い地位の人物が転落するというパターンを踏んでいるので、Tess は現在貧しいけれども、先祖は貴族だったという設定にすることによって、この小説がギリシャ悲劇を下敷きにしていることを示唆しているのだと考えられる。

Lang が、「『正しい裁き』がなされたのだ。そしてアイスキュロスの言葉を借りるなら、不滅なる神々の長は、Tess を弄ぶのを止めたのだ」に疑問を持ったのは、フランス自然主義小説も、ギリシャ悲劇的小説も、道德の問題は前面に出てこないはずなのに、Tess には、道德に関する議論があふれているからである。道德を問題にしているなら、なぜ Tess が転落したのか、問題になるはずである。Tess は、姦淫の罪を犯し、自分の過去を告白できず、殺人を犯し、絞首刑になった。この点は、よくある勧善懲悪の話としてとらえることができる。しかし、その一方で Tess は、他の登場人物より道德観に優れた人物として描かれている。Angel に過去を告白することを母親に相談した時に、そういう時は黙っているものだと諭されても、母親は自分とは考え方が違うのだと納得せず、仕事場でどんなに酷使されようと、真面目に働き、家族の貧困が危機的状况であれば、本心に染まないこともしている。そのように自分の身を犠牲にする性質を持っているからこそ転落しているともとれる内容になっているのである。

Lang は、後者の場合を考えて、そこに社会に対する抗議を見とめたと考え

えられる。“the President of immortals”はギリシャの神であるけれども、場所と時代設定が、イギリスのヴィクトリア朝であることを考えると、キリスト教の神も指しているという選択肢を排除することは難しい。そのために Lang も *New Review* において“a God”や“Him”と書き、ギリシャの神だけでなくキリスト教の神も含めているかのような書き方をしている。それに対して Hardy も“God or gods”と両方を含めている。Hardy は第5版の序論で「自分は、小説において、社会通念を破壊したり、議論をしたりしたいわけではなく、ただ世の中の印象を書いているだけ」(T. Hardy 24-5)と弁明をしているが、Lang はそう考えていなかったのである。

II. 背景にある衝突——出版界における立場の違い——

Lang が、*Tess* を批判したのは、彼らの出版界における立場の違いとも関係がある。Hardy は、1840年にイギリスのドーセット州ハイヤー・ボッカンプトンという田園地帯に生まれた。父親は石工頭、母親は女中あがりで、彼らが教育熱心だった影響で、Hardy は学校に通い教育を受けた。そして建築家の見習いをするかわら、文学や絵画といった芸術に親しみ、30才で小説家としてデビューした。彼は、田舎の自然を描けるという他の作家にはあまり見られない強みを生かし、デビュー以降は連続して小説を発表し続け、順調にその名声を高めていった人物である。

一方 Lang は、Hardy が生まれた4年後の1844年、スコットランドのセルカークに生まれた。父親は町役場の書記官で、母親は高名な弁護士娘だった。エディンバラ・アカデミー、セント・アンドリュース大学、グラスゴー大学、オクスフォード大学ペイリオル・カレッジで教育を受け、その後オクスフォード大学マートン・カレッジのフェローとして神話や民話の研究をした。1875年にロンドンに移り、ホメロスの叙事詩を散文で訳したり、シェイクスピアの研究書を出したりした。また、グリム童話など、世界中の民話や妖精物語を集めて訳し、*Blue Fairy Book* (1889)、*Red Fairy Book* (1890) などと色分けして童話集として出版し、それまでまとまった

童話集がなかったイギリスで好評を博した。さらに夫人も、彼の仕事の翻訳などを手伝う教養をそなえていた。

当時、本は高価だったのでわずかな裕福な人しか買えなかった。それほどお金はないが、小説が好きな大勢の人は、Mudie's を代表とする貸本屋で借りるか、定期刊行物の連載を読んだ。識字率が比較的低かったので、文字を読める人が音読するとなると、皆で読める内容でなくてはならない、家で自由な出費が許された人は限られているだろうから、その人が家族に安心して読ませられるものにする必要がある。そうすると、どうしても性的な描写は避けざるを得なかったであろう。

Lang は *Longman's magazine* の編集をしていたこともあり、編集者側の立場に立っている。彼の出版した本には、編集者の視点が顕著である。例えば世界中の民話を集めた民話集においては、原作に入っていた残酷な場面、差別的な場面、性的な場面などは削除し、穏やかかつ教訓的にまとめていることが多い。例えば『シンデレラ』の場合、元のグリム童話では、継母と一緒にシンデレラをいじめていた2人の姉は、鳥に目をつぶされて話が終わるが、Lang は、シンデレラが、今までの非道を悔いた2人の姉を優しく許し、城に住まわせて身分のいい男性と結婚させるという、より穏やかな教訓を感じさせる話にしている。

そう考えると、*Tess* は、家族で読める雑誌を目指してきた Lang にとって載せたくない作品であることであることは明らかである。*Tess* 以前の多くのイギリス小説において、女性キャラクターの性的な欲求は、望ましくない性質として、細かく描かれることはなかったが、*Tess* の場合は、発情期の猫に喩えられるなどして動物の生殖本能と結びつけられ、生々しく描かれている。Lang は、*Tess* の批評を読み、好意的なものが多いのと感じて、これは、雑誌を担う編集者として、そして批評家の重鎮として、放置できないと感じたのだろう。*Independent* に載った書評のように、Hardy が、姦淫をすすめているとの解釈も可能だからである。

編集者の立場に立てば、常に2つのことを意識しなくてはならない。ま

ず、本を出版することで問題を起こしてはならない。イギリスでは、1857年に Obscene Publications Acts が成立した。この法律は、裸体、性器、性行為に関する描写を「猥褻」であると定め禁止するものである。この時代、ポルノが蔓延していたので、当時さかんだった福音主義的な目的からそれをくいとめるべく定められた。しかしながら、その影響は、ポルノだけではなく、真面目な芸術作品にまで及んだ。警官が出版社へ行き、猥褻な出版物がないか搜索することが行われたため、編集者は、載せる作品に慎重にならざるを得なかった (Brown 104)。また、出版するからには売れる作品でなくてはならない。定期刊行物も買ってもらわなくては意味がないし、3巻本になったあと貸本屋に並ばなければ儲けは無いも同然だった。幅をきかせていた Mudie's は、家族で読めるものを中心に取り扱ったため、作家が自分の作品の中に性的な描写を入れることは、自殺行為だった。

一方で Hardy の立場は、以下の通りであった。駆け出しの頃は「連載物のうまい書き手」(F. Hardy 100) になることを目指したが、後々はより芸術性の高い作品を残すのだと心に決めていた。しかし 1890 年 1 月の *New Review* に「イギリス小説における率直さ」(“Candor in English Fiction”) という小論を載せ、「偉大なスタイルは、深い情熱を細かに描くことにより成立するが、その情熱を描く際に、必ず何か『ふさわしくない』(“unsuitable”) ものが現れる」⁴ と、性的な描写を排除しては、芸術性の高い作品は書けないと述べている。⁵

そのために、Hardy は、雑誌の編集者と意見をすりあわせていかなければならなくなった。Tess は、1888 年に書き始められた。翌年、主要なエピソードを、Tillotson 社に送るものの、「森の中での性行為、不義の子、権限なき者による洗礼などは、慣習上、小説に書かれるとは考えられない出来事」(Page 410) だとして、Hardy は書き直しを求められた。Hardy はそれを辞退し、Murray's Magazine 社に送ったが、「不適切なほどに性的に露骨」であると断られ (F. Hardy 222)、Macmillan's Magazine 社にも「性的描写が、瑞々し過ぎる」と断られた (Wright 174)。そこで Hardy は、原稿

は見せずに *Graphic* と契約をし、自ら「森で Tess の処女が奪われる場面」「Tess が赤ん坊の洗礼をする場面」を切り取り、手直しをした上で連載をした。それは、Hardy にとって骨の折れる作業だった。

一見、Hardy の方が時代に合っていなかったように見えるが、Lang がわざわざ *Tess* を好きでないと公言したかったのは、今までと違う時代が来ていることを、Lang が強く感じていたからであるとも推測できる。Lang が編集顧問をしていた *Longman's magazine* は 1882 年に創刊された雑誌で、教育法が改正され、識字率が上がったことを受け、新しい読者層に知的で楽しい純文学を、安く提供しようと作られたもので、編集長は Charles Longman だったが、実際に雑誌を動かしていたのは Lang だった (Sullivan 209-13)。しかしながら、その雑誌は挿絵がなく親しみにくかったため、販売数は伸び悩んでいた。一方で、挿絵入りの *Illustrated London News* や *Graphic* が急成長をとげていた。Hardy の *Tess* の連載を引き受けたのは *Graphic* だった。Lang は *Longman's Magazine* での Hardy への返答において「自分はこんな版を重ねる小説は書けないが、もし書けたとしたら、じつくりと印税を眺めて、強欲な笑みを浮かべ、あとはホラティウスの『世間は、私を非難する。しかし私は、我が家で箱の中の金銀を眺めつつ、自分を誇らしく思う』という詩を引用するだけなのに」(Cox 238) と嫌味を述べている。

III. 根底にある衝突——自然観の違い——

このように考えると、実際に時代の波にのっていたのは Hardy ともとれるが、彼は、数年後に小説を書くことを諦めて、詩人に転向することになる。彼は、1892 年 4 月 15 日の日記に「自分の書いたつもりである事と、読者の感想に食い違いが生じることは不思議だ。そして、もしこのような事が続くなら、小説を書くことを続けられない。撃たれるのが分かっている。立ちあがるのは、愚か者に違いないから」⁶ と述べている。この Hardy が読者との間に感じた無視できない違和感こそ、彼にとって大きな問題だっ

たのではないだろうか。

この違和感に深く関わっていると思われるのが、Hardy が、第 5 版の序論において、副題を批判した批評家は、「キリスト教の繊細な部分」における“pure”のみならず、「自然」の意味における“pure”の意味を無視していると反論したことである (“They ignore the meaning of the word [pure] in Nature, together with all æsthetic claims upon it, not to mention the spiritual interpretation afforded by the finest side of their own Christianity.” T. Hardy 24)。つまり、Hardy が作品で表そうとした“pure”と、Lang ら読者が感じ取った“pure”にある大きな溝こそが、Hardy の感じた違和感なのではないだろうか。この章では、まず Hardy の言う「キリスト教の繊細な部分における“pure”」と「自然の意味における“pure”」を推測し、それを Lang の解釈する“pure”と比較してみる。

まず、「キリスト教の繊細な部分」という視点から見て、Tess がどのように“pure”なキャラクターとして創造されているかを考察する。Tess は、それまでに描いた *Far from the Madding Crowd* (1874) の Oak や *The Woodlanders* (1887) の Winterborne などと類似性を持っていることが分かる。彼らは、他のキャラクターと比較して、自分の利益より他人の利益のために尽くそうとする道徳観を持つ。若い農場主の Oak はちょっとした事故で、商品の羊達を失い無一文になった時、自分は家柄のよい Bathsheba の結婚相手としてふさわしくないと考えて身を引くが、Bathsheba が困った時はいつでも助ける優しさを持っている。Winterborne も、家をなくした時、婚約者だった Grace をあきらめるが、彼女が頼ってきた時は、自分より彼女を優先して助けている。そして Tess も、家族の貧困を救うために好きではない Alec のもとに働きに出たり、家を失った家族を救うために復縁に応じる選択をしたりしている。

上記のように自分を犠牲にする Tess の性質は、Hardy の作品の中では、自分の利益を追求することをよしとする道徳観と対比され、美しいものとして描かれ、語り手によって、聖書の文言になぞらえて褒め称えられてい

る。例えば、Tess が Angel に過去を告白した後に、Angel も過去を隠していたことを知っても彼を責めなかった Tess を、「使徒的な慈愛そのもの」(T. Hardy 236) と賞賛し、「コリントの信徒への手紙 1」の文言を引用している。また、誰より真面目に働く Tess の姿を『箴言書』の文言を引用して「ルビーのように価値ある妻」(T. Hardy 255) と賞賛したりしている。

一方で、Hardy は、Tess と「自然」のつながりを丁寧に描き出して彼女が「自然の意味において“pure”」であることを強調している。それは、Tess を動物に喩えることと、語り手に、大きな自然観を提示させることによって成されている。例えば Hardy は、Tess を「猫」に喩えることで、Tess が動物であり、動物界には罪という概念はないことを示唆している。Tess が Talbothays 牧場で、夕暮れに仕事を終えて散歩をしていたところ、Angel がひくハーブの音に引き寄せられていく場面である (“The outskirts of the garden in which Tess found herself had been left uncultivated for some years She went stealthily as a cat through this profusion of growth, gathering cuckoo-spittle on her skirt, cracking snails” T. Hardy 134)。Hardy は手入れされずに生い茂る庭を描くことによって、まだ文明に侵されていない状況を設定している。そして、Tess が無意識に彼に引き寄せられていく様子を、虫をスカートにつけたり、カタツムリを踏みつけたりすることで表している。Tess は自分の過去を鑑みて、Angel をあきらめるべきと考えているけれど、無意識下では、Angel を強く求めていることを暗示しているのである。この比喩は、語り手による Tess の弁護によって、より生きてくる。Tess が自分の過去を Angel に告白するかどうかで強く悩む場面において、Tess が告白しなくてはならないと考えつつも、告白したくないという気持ちを強く持ってしまったことを、「恋のさとし」(“what love counseled”) が「自然」と共に Tess の心の内から湧き上がり、彼女の良心を鈍らせてしまっていると表現し、人間として自然な欲求であると弁護している。⁷

さらに、Hardy は、私生児を生んでしまった Tess を社会の攻撃から弁護するため、キリスト教から解放された大きな自然観を提示している。Tess

は生家に戻った後、世間の目を気にして、日が暮れてから散歩に出かける生活をしていた。彼女は、木々のざわめきさえも、自分を非難していると感じるほどに落ち込んでいたが、そんな Tess を、語り手は以下のように説得する。

But this encompassment of her own characterization, based on shreds of convention, peopled by phantoms and voices antipathetic to her, was a sorry and mistaken creation of Tess' fancy—a cloud of moral hobgoblins by which she was terrified without reason. It was they that were out of harmony with the actual world, not she She had been made to break an accepted social law, but no law known to the environment in which she fancied herself such an anomaly. (下線は筆者による) (T. Hardy 101)

ここで語り手は、Tess が自分を非難していると感じる音は“phantoms”、“fancy”、“hobgoblin”といった実態のないものであり、“convention”が作り上げているという。“convention”とは社会によってつくられるもので、大きな自然観から見れば、Tess が私生児を生んだところで、罪とはいえないという論を展開している。語り手の意図が、Tess の罪を小さく見せるためであることは、無人島の比喻によっても明らかである。Tess がもう一度働きに出る決意をする場面で、Tess に「もし、自分が無人島にひとりだったら、私生児を生んでしまったことで落ち込むことはないだろう」と言わせている。このように、Tess は罪を犯している点で「文明」の観点から見れば“pure”ではないが、「自然」の観点から見れば“pure”をとらえることが可能となることを示している。

一方で、Lang はどのような解釈をしたのだろうか。Lang は、Tess の“pure”について「Tess がいつでも“pure”であるようには見えないが、Tess の陥ったあまりに困難な状況を思うと、私には判断ができない」⁸と述べている。これは、「キリスト教の繊細な意味」においては、Tess は罪を犯していても“pure”でないとは言えないという見解を示している。しかしなが

ら、彼は Tess の性的な欲求が描かれる部分に嫌悪感を示し、Tess を「好色」(“warm”) であると非難している (Cox 240)。これは、彼が Tess の「自然の意味における “pure”」を受け入れられなかったことを示している。

Lang だけでなく、同時期に他の批評家によって書かれた書評にも、Hardy の自然観とのズレを感じさせるものが多い。当時の批評は大きく 2 つに分かれ、ひとつは Tess をキリスト教における罪人であると判断するもので、もうひとつは Tess を社会における被害者であると判断するものである。どちらにも「自然」というコンセプトは見逃されている。

Hardy は、初版の序論において「皆が思っていることを形にした」と述べている。しかしながら、いざ書評を見てみると、自分の自然観と人々の自然観がずれていることを発見したのである。Hardy は、最新の科学を積極的に学んでおり、皆も言葉として理解していないまでも、そのような空気を感じていると思っていたが、実際はそうではなかったのである。

結論

Lang は現在、児童文学の分野において妖精物語集を出したことが評価され、名を残しているが、イギリス文学の分野では Hardy の方の知名度が上がってしまった。そのために、Lang が当時、ジャーナリストとして精力的に活動し、様々な定期刊行物に、幅広い文学の知識を生かした記事を多数書いていた (Orel, *Victorian* 136) 実績については、「一般読者と、真剣な文学者の間を裂いた人」⁹ や「彼と同時代の文学を好まず、新しい視点を持った文学に不信感があった人」¹⁰ として非難にされてしまう傾向にある。ふたりの衝突についても、Lang の意見が顧みられることがほとんどないが、時代背景を見れば、彼の言い分が的外れとは、必ずしも言えないことが理解できる。

Hardy と Lang は、同年代で文学界を牽引していたという共通点を持ちながら、表現技法への考え方の違い、出版界における立場の違い、そして根底にある自然観の違いによって、必然的に衝突することになった。その

衝突の詳細を探ることで、当時の出版事情ばかりでなく、様々な文学観や自然観の葛藤も浮かび上がるのである。

註

1 “Here are all the ingredients of the blackest misery, and darkens till ‘The President of the Immortals had ended his sport with Tess’. I cannot say how much this phrase jars on one. If there be a God, who can seriously think of Him as a malicious fiend? And if there be none, the expression is meaningless.” (Cox 196)

2 “In the introductory words to the first edition I suggested the possible advent of the genteel person who would not be able to endure something or other in these pages In another place he was a gentleman who turned Christian for half-an-hour the better to express his grief that a disrespectful phrase about the Immortals should have been used; though the same innate gentility compelled him to excuse the author in words of pity that one cannot be thankful for: ‘He does but give us of his best.’ I can assure this great critic that to exclaim illogically against the gods, singular or plural, is not such an original sin of mine as he seem to imagine. True, it may have some local originality; though if Shakespeare were an authority on history, which perhaps he is not, I could show that the sin was introduced into Wessex as early as the Heptarchy itself. Says Glo’ster in *Lear*, otherwise Ina, king of that country:

As flies to wanton boys are we to the gods;
They kill us for their sport.” (T. Hardy 25)

3 “‘The President of the Immortals’ (in *Æschylean* Phrase) had ended his sport with Tess’. This was the moral and marrow of his romance, as I supposed, and the phrase must seem equally illogical to an Atheist and Christian, to a Buddhist and Bonze. For nobody in his senses now believes in a wicked malignant President of the Immortals, whatever Glo’ster may have said in his haste while Ina was a monarch of the West Saxons. No; one need not be a Christian, nor pretended to be a Christian, before resenting a comment on the ‘The President of the Immortals’ which is confessed to be illogical, and which — if Mr. Hardy does not believe in a malignant ‘President’ — is insincere and affected.” (Cox 239–40)

4 “In a ramification of the profounder passions the treatment of which makes the great style, something ‘unsuitable’ is sure to arise” (Orel, Thomas 129)

5 当時、ゾラの性的描写がイギリスで問題になった時、規制を弱めるように求める運動に Hardy も参加している。

6 “How strange that one may write a book without knowing what one puts into it — or rather, the reader reads into it. Well, if this sort of thing continues no more novel-writing for me. A man must be a fool to deliberately stand up to be shot at.” (F. Hardy 246)

7 “In reality, she was drifting into acquiescence. Every see-saw of her breath, every wave of her blood, every pulse singing in her ears, was a voice that joined with nature in revolt against her scrupulousness. Reckless, inconsiderate acceptance of him; to close with him at the altar, revealing nothing, and chancing discovery; to snatch ripe pleasure before the iron teeth of pain could have time to shut upon her: that was what love counseled.” (T. Hardy 181)

8 “Her [Tess] behavior does not invariably seem to me that of ‘pure woman’, but perhaps I am no judge of purity, at all events in such extraordinary disadvantageous circumstances.” (Cox 241)

9 ang “did harm by helping to widen the split between the general reader and the serious artist in fiction.” (Maurer 170–2)

10 “. . . Lang, with relatively few exceptions, found experiments in contemporary literature distasteful. He distrusted those writers who were preparing the way for modernist perspectives . . .” (Orel, *Victorian* 136)

引用文献

Brown, Julia Prewitt. *A reader's guide to the nineteenth century English novel*. London: Collier Macmillan, 1985.

Cox, R. G., ed. *Thomas Hardy: The Critical Heritage*. London: Routledge & Kegan Paul, 1970.

Hardy, Thomas. *Tess of the D'Urbervilles*. London: Macmillan, 1974.

Hardy, Florence Emily. *The Life of Thomas Hardy, 1840–1928*. London: Macmillan, 1970.

Maurer, Oscar. “Andrew Lang and *Longman's Magazine* 1882–1905.” *Texas Studies in English* 34 (1955): 152–78.

Orel, Harold, ed. *Thomas Hardy's Personal Writings*. London: Macmillan, 1967.

——, *Victorian Literary Critics*. NY: St. Martin's Press, 1984.

Page, Norman, ed. *Oxford Reader's Companion to Thomas Hardy*. NY: Oxford University Press, 2000.

Sullivan, Alvin, ed. *British Literary Magazines: The Victorian and Edwardian Age 1837–1913*. London: Greenwood Press, 1984.

Thwaite, Ann. *Edmund Gosse: A Literary Landscape 1849–1928*. London: Secker & Warburg, 1984.

Wright, T. R. *Hardy and His Readers*. London: Palgrave, 2003.